＜HHS 60 点未満 193 例中、PSPT-R セラピーで手術回避できない例とできる例の分析＞

Hayashi K. et al. Current Medical Research and Opinion, 2025 Jan 18:1-35
https://www.tandfonline.com/doi/full/10.1080/03007995.2025.2454508 （日本語訳可）

1：PSTP-R セラピーで改善しなかった例（多くは、手術になりました。）
すべての患者背景因子（年齢、BMI，罹病期間・レントゲンの軟骨減少・消失・痛みの場所

・立ち上がりの痛み・歩き出しの痛み・歩き出した後の痛み・・・・
など 38 項目）と PSPT-R セラピー開始後の HHS の変化に対して統計学的解析（multinomial logistic regression analysis）を行った結果、PSTP-R セラピーで改善しない例の危険因子は初診時の臀部痛でした。レントゲン上の軟骨減少・消失は、手術の危険因子ではないことが明らかになりました。

2：PSTP-R セラピーで改善し手術回避できた例
PSTP-R セラピーで改善し手術回避できた例ではレントゲンの Kellgren-Lawrence (K/L grade) grade（関節の変形の度合い）が軽度であるほど改善度が高い結果になりました。

↓

1：軟骨消失して骨同士がぶつかっている例で臀部痛がない例では PSPT-R セラピーで手術回避できる可能性が高いと思われます。さらにレントゲンでの K/L grade（関節の変形の度合い）が低ければより高い改善が期待されます。
レントゲン上の軟骨減少・消失は、手術の危険因子ではないことが明らかになりました。

2：軟骨消失してかつすでに臀部痛がある場合は、手術を検討する必要性があることが多いと思われます。